

音源の比較試聴(11)
—マーラー交響曲 3 番—

1. 始めに

前報(10)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のグスタフ・マーラーの交響曲 3 番を聴いていきます。

アナログ盤

PHILIPS SAL.3593-3594

ベルナルド・ハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

CD

BMG BVCC-38473-74

デヴィッド・ジンマン指揮チューリッヒトーンハレ

STAGE+

クラウディオ・アバド指揮ルツェルン祝祭管弦楽団

アンドリス・ネルソンス指揮ウィーンフィル

レナード・バーンスタイン指揮ウィーンフィル

ベルリフィルデジタルコンサートホール

ズビン・メータ指揮ベルリンフィル

ロレン・ツォヴィオッティ指揮ベルリンフィル

CONCERTGEBOUWORKEST

マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のハイティンク指揮アムステルダムコンセルトヘボウは、録音年代は不明ですが、ハイティンクの初期の演奏と思われます。やはりアナログらしく朗々と響きのよい鳴り方で、アナログでは明瞭さをかきがちなクランカッサの響きもしっかり伸びています。

CD のジンマン指揮チューリッヒトーンハレは、2006 年の録音で、この再生経路にはアースアキュライザーを使用していませんが、**GPS** クロックを入力し、仮想アー

スの **Crystal Ep** を接続した **EMT981** の特徴として、デジタルらしくない朗々とした鳴り方をしています。

STAGE+のアバド指揮ルツェルン祝祭管弦楽団は、2007年のルツェルン音楽祭の収録で、音の緻密さは後続のネルソンス指揮ウィーンフィルの2021年のザルツブルグ音楽祭に及ばないところがありますが、朗々とした響きはホールの特徴のように感じられます。

STAGE+のネルソンス指揮ウィーンフィルは、2021年のザルツブルグ音楽祭での収録で、最新の収録でウィーンフィルの演奏とあって、緻密でバランスよく、非の打ちどころのない演奏です。

STAGE+のバーンスタイン指揮ウィーンフィルは、1972年ウィー楽友会館での収録で、倍音の伸びやグランカッサの量感など、ややナローレンジの感もありますが、1972年の収録とは思えないほど、リアルさを感じさせてくれます。

ベルリフィルデジタルコンサートホールのメータ指揮ベルリンフィルとヴィオッティ指揮ベルリンフィルは、前者が2021年の収録、後者が2020年の収録ですが、椅子に座ってのメータの指揮、若いヴィオッティの指揮ともに安定した演奏で、コンサートマスターのソロヴァイオリンや木管の自然さ、低弦の分解能までが向上しています。

CONCERTGEBOUWORKESTのヤンソンス指揮アムステルダムコンサートヘボウは、この配信サイトはしばらく聴いていませんでしたが、冒頭のホルンの斉奏や木管の質感、あるいは、冒頭のティンパニやグランカッサの量感と明瞭度も向上しています。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアクライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAVドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上